イブン・コルダードベ「ユダヤ商人とロシヤ商人の旅程」飜譯

藤本勝次

一

Ibn khordādhbeh[1]は回暦三世紀（西暦九世紀）の最初の年に生れ、回暦二七二年（西暦八八五）に沒したといわれているイスラム地理學者である。彼の父はイスラムに改宗したペルシヤ人で、タバリスターンの高官に任命された。[2]その關係で彼は早くから官吏生活をはじめ、古代のメジヤであるアヤ・ジバールや後にバグダッド等の驛遞局[3]の長官になつた。彼の驛遞局長官就任の年や在任期間については不明であるが、アッバス朝のカリフ、アル・ムウタミッド（西暦八七〇—八九二）の信用と寵愛を受け、カリフ宮廷において、音樂、詩、舞踊その他遊戯、酒にいたるまで、談論の中心人物であつたようで、それらに關する著書[4]をものしている。しかし此れらの著書はすべて無くなり、現在殘つていて彼をして有名ならしめるものはとりもなおさず、Kitāb l-masālik wa l-mamālik すなわち「諸道程及州郡志」なる標題の著書である。

これはアッバス朝カリフの依頼により編修されたもので、回暦二三二年（西暦八四六）に着手され、はつきりした日付は不明であるが彼の死ぬ前まで續けられたようである。おそらく彼がバグダッドかどこかの驛遞局に勤務していた時のことと思われるが、その爲に文書局の公文書から色々の材料を集めることが出來て歴史地誌の重要なる源泉となりえて後世の地理學者によつてしばしば引用されるようになつた。此の

著書は最初、Barbier de Meynard によつて飜譯をつけて刊行され（Journal Asiatique 1865 V）、その後、De Goeje が改訂して刊行した。（Bibl. Geogr. Arab. 1889 VI）

私は De Goeje のテキストから、「ユダヤ商人[5]とロシヤ商人の旅程」に關する記事を飜譯し、若干の註をつけ加えて九世紀頃の東西交通路の一面を再現しようと思うが、紙面の關係上アラビヤ語テキストをのせることの出來なかつた事をお斷りする。前掲 B. G. A の第六卷、一五三—一五五頁を參照されたい。なお、誤譯および註の不備不明なる點に關して御教示をいただけば幸甚と思う。

二

これ〔から述べるの〕は rādhāniyat[6] の Yahūd（ユダヤ）商人の〔通商〕路〔について〕である。彼等はアラビヤ語やペルシヤ語、また Rūmīyat[7]（ギリシヤ語）や 'Afrandjīyat（フランク人の言葉）、'Andalusīyat（スペイン語）、Saqlabīyat[8]（スラブ人の言葉）をも話し、陸路をあるいは海上を、東洋から西洋へ、また西洋から東洋へと旅をして、西洋からは khadam[9]（奴隷）、djawārī（女奴隷）、gilmān（若い男奴隷）、dībādj[10]（錦）、djulūd 'l-khazz（海狸の毛皮）、firā'（手皮つきの服）、sammūr（黒貂の毛皮）や suyūf（劍）を運ぶ。

彼らはフランク王國から西の海（地中海）に船出して 'al-Faramā[11] に向い、〔此所で上陸して〕、彼らの商品を〔駱駝の〕脊にのせて陸路二五ファルサク[12]はなれた 'al-Qulzum[13] に運んで此所から東の海（紅海）に船出し、'al-Djār や Djidda に向う。そしてさらに進んで 'as-Sind, 'al-Hind や as-Sīn（支那）にまで行く。

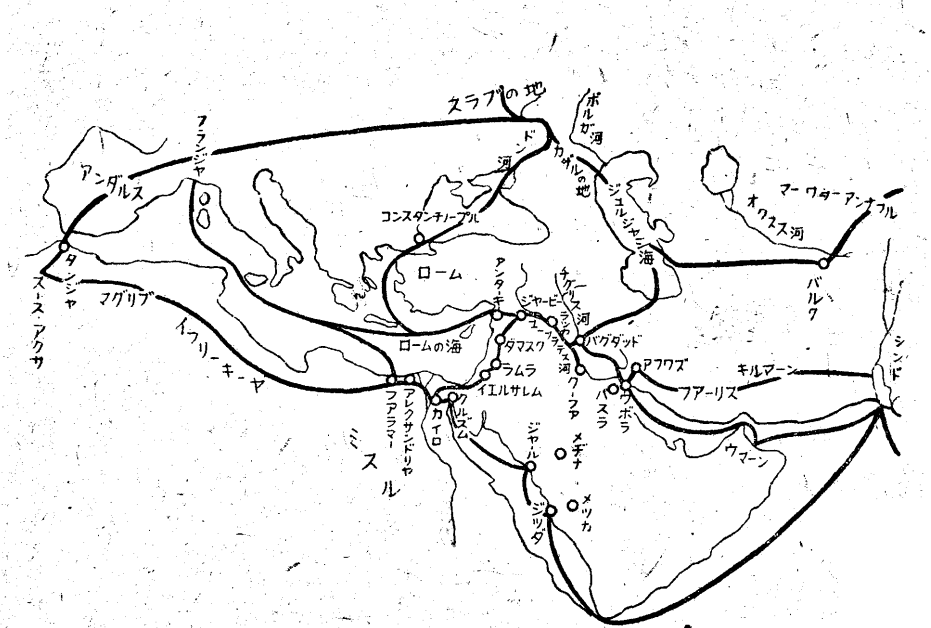
彼らが支那から〔歸える時には〕 misk（麝香）、'ūd（沈香）、kāfūr（樟腦）、dār-sinii（肉桂）やその他これら諸地方から出る〔東洋の〕產物を運んでクルズムに歸り、ファラマーに商品を持つて行つて地中海に出るのである。●

ユダヤ商人達のあるものは、しばしば Qustantīnīyat（コンスタンチノープル）に商品をもつて行つてビザンツの人に賣ることがあり、またあるものは、フランク王國で商品を賣りさばく。

もし彼らが欲するなら（時には）、フランクから地中海を船に商品を積んで 'Aṭṭāki[16] に行き、陸路三日間の旅をして 'al-Djābī[17] に着き、それから 'al-Furāt（ユーフラテス河）を船でバグダッドに向い、つゝで Didjla（チグリス河）を下つて 'al-'Uballa[18] に行つて、そこからウマーン、シンド、ヒント、支那えとつぎつぎに航海して行く。

スラブ人の一種族である Rūsiyun（ロシヤ）商人の通商路についていえば、彼らは海狸の毛皮や黒狐の毛皮に劍をスラブの地の最も奥からロームの海（東地中海）に運びこんで賣る。そこでビザンツの王は、その商品に十分の一税を課す。

さもなくば彼らはスラブの河 Tenīs[19] を下つて 'al-Khazar[20] の主邑 Khamlīdj のそばを通り[21]、此所で此の町の長に十分の一税を課けられ、つぎにさし渡し五百フアルサクもある Djurdjān[22] 海（カスピ海）に出て自分の行こうと思う岸に向う。またしばしば彼らのあるものは、商品を駱駝にのせて、カスピ海からバグダッドに輸送する。〔此所で〕スラブ人の奴隷が彼ら商人の通譯をする。そしてロシヤ商人が naṣārā（キリスト教徒）のまゝで〔改宗せずに〕許される場合は



[ユダヤ及ロシヤ商人の隊商路略圖]

djizyat（人頭税）を支拂わねばならぬ。

彼ら（ユダヤ[23]商人）の陸上通商路についていえば、彼らの中でスペインから出發するもの、あるいはフランク王國から出發するものは〔まず〕'as-Sūs l-aqṣā[24]に行き、Tandja（タンジール）に向い、それから、'Ifriqiyat[25], Miṣr（エジプト）、Ramla[26], Dimashq（ダマスク）、'al-Kūfa、バグダッド、Baṣra、'al-Ahwāz[27], Fāris, Kirmān[28]シンド、ヒンド、支那え〔と次々に〕旅を續ける。

またしばしば彼らはスラブの村々を通つてビザンツ帝國の後側（北方）の路を取り、カザルの主邑カムリージュに行き、カスピ海を渡つて Balkh に達し、河向うの地[29]（トランスオクシアナ）を越えて Tuġuzġur[30]の Wurut に旅をつゞけ支那に達するのである。

註

①コルダードベに關しては次の文献參照。
Encycl. of Islam 1927 II, p. 398
C. Huart: Litterature Arab 1923 p. 295
Brockelmann: Geschichte der Arabischen Litterature I. p. 225
Journ. Asia. 1865 V. Barbier de Meynard: p. 9
De Goeje: Bibl. Geogr. Arab. VI 序文

②ペルシヤ人の考えが諸カリフ政府の組織に影響したことの大なることは周知の事實で四政廳（デーワーン）すなわち掌璽局、文書局、税務局、地租局の設立とその職權はサッサン朝時代のペルシヤ行政樣式から借りたとされている。アラビヤ人が行政上の重要な職に外國人をつけることは珍らしくなく、東方地域においてはペルシヤ人後にはトルコ人において特に甚だしい。

③驛遞制度（Barīd）カリフの專制政治を可能ならしめるに役立つたのにバリード制度がある。これは單に公文通信の傳達のみを目的とするのでなく、官吏、軍隊の運搬や宮廷や官廳の小荷物の移轉までも行う。バリードなる語はラテン語の Verdus（通信に用う駿足の馬）から借りたので、これから飛脚、驛遞の意味に使われるにいたつた。名前のみならず制度組織もローマ、ペルシヤのそれを受繼ぎ或一定の間隔（ペルシヤ＝一〇粁、シリヤ、エジプト＝二〇粁）に宿驛を置き、宿驛から宿驛えと馬によつて傳達する。驛遞の監督官はその仕事の正確、迅速の責任があると同時にその地方に起つた事件をカリフに報告する一種の特殊警察の役もし、專制統治者の密偵で、時には統治者自身にも危險な存在であつた。コルダードベが政府高官と親しく後世彼がカリフの友達のみならず大臣達の一人であると云はれたのも彼の人柄だけからではなかつたのであらう。
（Encycl. of Islam I p.659 略稱をE. I とする。Journ. Asia. 1865 V p. 10–13＝略稱 J. A. とする。）

④彼の著書目錄は次の如し。
合奏の美。料理人の技術。勝負事と娯樂の書。酒の書。會食者と家

族の教範。ペルシヤ人と遊牧民の系圖の集錄。諸道程及州郡志。天文學の書。

⑤「ユダヤ商人の旅程」は、M. Reinaud: Introduction à la géographie des Orientaux p.58 に最初に譯されたが、此の文献は見ていない。

⑥此のユダヤ商人につけられた異名はサウァド（メソポタミヤの豊饒なる地）の東部 Radān 郡にその名の起りをもつと meynard 氏は云う（J.A. 1865 V p. 512 註2）が、Blachère 氏はペルシヤ語の râh-dân（道の玄人）にその名の起源を求め屢々 rahdānīyat と書かれるとする。（Extraits des Principaux Géographes Arabes 1932 p. 28 註1）

⑦ロームは初期イスラム時代にはビザンツ帝國の人をさしギリシヤ人のキリスト教徒を意味する。

⑧サクラブは（複數形 ṣaqāliba）普通中世イスラム地理學者によつてスラブ人をさすに用いられる語。コンスタンチープルからボルガ河に接する地域に住み、西歴七世紀に東國境地帶に定住し、アラビヤ人はビザンツとの最初の戰で彼らを知つた。（E. I. IV p 77, p. 467）

⑨khādim の複數形で召使の意。此の語は男女共に用いられ、家事一般を世話する自由民の召使にも或は奴隷の意味にも使われるが、此所では奴隷の一般的意味につかわていると思われる。

⑩ディーバージュは雜色の絹織物でペルシヤ語の dibiā dibāh のアラビヤ語化されたもの。經糸も緯糸も共に絹の美しい色彩のある織物で種類も多く着物用のものも絨氈用として用いられるものもある。品質の良いものは染色模樣共に華麗で織布も厚く高價で原産地はサツサンペルシヤであるらしい。（E. I. I. p. 967）此所で西洋からの輸入品として記載しているのは恐らくスペイン等の絹織物であらう。

⑪アレクサンドリヤの西方、地中海岸のエジプトの港。西歴一一〇〇年に十字軍により破壞された。（前掲 Blachère: p. 28 註7）

⑫イラン語（アルメニヤ語 hrasakh シリヤ語 prasakh）から借用した語で一時間に馬が速歩で行く距離に相當し、ペルシヤではすこし違うが、アラビヤでは五七六二・八米である。（E. I. II p. 70. Blachère: p. 23 註8）

⑬現在のスエズの近くの紅海岸にあつた海港で昔はナイル河から紅海にひかれた運河の口にあつた。此の運河は新エジプト王國第廿六王朝のネカウ王がはじめて大規模な計劃の下に改造し後ペルシヤのダリウス一世が起工し、紀元二世紀にトラヤヌス帝が再び開鑿したものでイスラム時代では回歴二三年（西歴六四三）にオマルがエジプトとの穀物通商促進の爲に修理している。此町は他のイスラム地理學者の記事によれば水も乏しい町であるが、唯一の重要性は紅海上の船出の出發點であることで、イドリーシヤヤークートの時には沙漠化したと云われる。（E. I II p. 1114）

⑭アル・ジャールはメディナの、ジッダはメッカの外港で共に紅海岸の重要貿易港で、後者は回歴二六年にカリフ・オスマーンによつてメッカの外港に選ばれて以來その重要性をました。

アラビヤ地理書に見える地名には定冠詞の al の着いているのと、無いのがあるが、これは嚴密に云えばアラビヤ語のみに冠詞をつけ外來語には着けないのが規則である。しかしこれは全然守られていない樣で、例えばチグリス河はデイジュラでユーフラテス河はアル

フフラートで共に外國語である。またジッダも初期の著者によつてアル・ジッダと書かれる事のあるのを見ても明である。(Strange: Land of Eastern Caliphates p. 21. 以後 L.E.C.とする)

⑮周知の如く、シンドとヒンドはもともと同一の言葉で、サンスクリットの sindhu (河) がペルシヤ語の影響をうけてアヴエスタでは hendū となつて來た。しかしイスラム初期の地理學者はこれを區別して用い、シンドはインダス河とミフラーンに接する國々に限りヒンドは回教徒征服地以外の印度をさしていて、後にヒンドの名が全印度を含む樣になつた (E. I, II p. 312, L.E.C. p. 331)

⑯ギリシヤ人の所謂アンチオキヤで北シリヤの都市。前三〇〇年にアレクサンダ大王沒後のシリヤ王國のセレコス一世によつて昔のギリシヤ植民地に創設された。商業の中心地としてシリヤの首府となり、ローマとアレクサンドリヤに次ぐ全ローマ帝國内の最も重要な都市として繁榮した。しかしサツサン朝ペルシヤが興るに及び、東ローマの東方勢力を弱める爲に攻擊され、コスロー一世によつて五三八年に破壞された。後ユスチニアヌス帝により再建されたが、六三八年にアラビヤ人により占領され對ビザンツの國境防衞都市となつた。現在では通商も衰退し市場も重要でなくなつたが、當時はユーフラテス河から地中海に出るにも、シリヤから小アジアに行くにも兩通商路の交叉點で重要な商業都市でもあつた。アンターキーは普通名詞で「絨氈」を意味し織物工業の中心地としての昔の地位を示めしている (E. I. I p. 359-360)

⑰ De Goeje はユーフラテス河岸の Bâlis の附近の地名としている (B.G.A. IV p. 115 註1)。バーリスはラツカの西にあり此所からユーフラテス河は北上している。此所はシリヤへ行く河港で、多くの隊商路の中心點で、西歷十世紀頃にはなお人口稠密な都市であるとムカダツシーは記している。 (L.E.C. p. 107)

⑱ウボラはギリシヤ人にアポロゴスとして知られたチグリス河口のペルシヤ灣頭東洋貿易港である。西歷一世紀頃から既に東洋貿易港として知られていたが六・七世紀の間に一層繁昌した。アラビヤ人が此地を占領してから回歷一七年(六三八)にカリフ・オマルはウボラの卑濕をさけてやゝ内地にバスラ市を建設し、八九世紀にかけて繁榮したのでウボラはやゝ東洋貿易港としての重要性を失つたがなお相當繁昌していた。(桑原隲藏著波斯灣の東洋貿易港について東西交通史論叢頁三六〇—。L.E.C. p. 44-47)

⑲ De Goeje はドン河にあてている。「スラブの河」という語は後世の地理書にはなくなり「ルースの河」と變形しているが、このことはコルダードベにあらわれた記事がロシヤにおけるノルマン勢力の强固になる以前の狀態を反映していると考えられている。 (E. I. III p. 1181)

⑳西歷六世紀頃東ヨーロッパの草原はトルコ民族の王國に屬していたが、その支配から脫してカザール人が遊牧王國を造つたといわれる。その首府は、はじめボルガ河畔にはなかつたようで、六二七年に對ペルシヤ戰におけるビザンツ帝國の强力な同盟者であつた。七二〇年にアラビヤ人と戰つて敗れ、その住居をコーカサスの北斜面からボルガの下流に居を移したといわれる。(E. I. I p. 786)

㉑ B de Meynard のテキストによれば(J. A. p. 116 12行目) この箇所は「スラブの河を船で下つてカザルの町を通る支流を横ぎり…」となつており、スラブの河と解釋している。つまり船 (sufun) を Tenis に、支流 (khalidj) を khaunlidj に訂正されていることに

なるが、どちらが正しいのか寫本が見れないので判斷し得ない。

㉒カスピ海はタバリスターン海、ジュルジアーン海、バークー海等と種々の呼び名があるが、これはアラビヤ人が湖や海を呼ぶのにその岸にある地方や都市の名で呼ぶからで、カスピ海は後にカザル海と味ばれるのは中世初期にその北方にあつたカザール王國からその名を取つたのである。(L.E.C. p. 22-23. p. 458)

㉓此所の「彼ら」という人稱代名詞は、ロシヤ商人をさすものとして取れ、イスラム百科事典Ⅲ頁一一八一、ルースの項にもコルダードべの「ロシヤ商人の路」として此所の記事が出ている。しかしDe Goejeは「ユダヤ商人」と解釋し、內容からみてもその方が穩當であるので彼の說に從つておいた。

㉔「あちらのスース」の意味。現在の南部モロッコ地方で西に太平洋に續く地方である。イスラム地理學者の記事によれば穀物果物共に豊富にして特に甘庶で有名である。回歷一一七(七三五)年にハビーブ・ブン・ナビー・ウバイドにより征服されイスラムに改宗した。スース地方はタンヂールを首府とする北部モロッコのスース・アドナ(こちらのスース)との二つに區別されている。(E.I. IV p. 568)

㉕ラテン語のアフリカから轉訛。アラビヤ人によつて現在の北アフリカの東部をさし、西はマグリブと呼ばれる。

㉖パレスチナの一都市。エルサレムの東北東にある。ウマイヤ朝のカリフは好んでパレスチナの諸都市に住んだが、ワリードの時彼の弟でパレスチナの知事であつたスレイマンがラムラの新都市を回歷一八年に建設し、州政府を此所に移した。巨大な貯水池の造築は有名である。(E.I. III p. 1115-1117)

㉗アフワーズはクジスターンの首府。輸出港であるバスラの商品集積地で多くの大倉庫があり各地からの商品をバスラに運ぶ前に此所で貯藏した。此の地方の砂糖は十世紀頃のペルシヤ、メソポタミヤ全地域に輸出され、デイーバージュの製造も有名であつた。(L.E.C. p. 233-234. p. 246)

㉘アラビヤ人は一地方の首府は特別にそれ自身の名前があつても、その地方の名前によつて呼ぶのが普通で、ダマスクは今なお、アッ、シャーム(シリヤの首府)と呼ばれる。そこでキルマーンといえば首府のシールジャーンをさすが後世ではシールジャーンが崩壞してから設けられた現在のキルマーン市をさす。

㉙此の河はオクス河をさし、イスラム地理學者は此の河をペルシヤ人とトルコ人との境界線と考えた。

㉚Tuġuzġurは初めラシード・ウッデーンに見えるTokuz-Uiġurよりウイグール人と考えられたが、後にオルコン碑文等に見えるTokuz-Oġuz (ġuz) から最近數人の學者によりTuġuzġuzと讀むべきでありウイグール人のみをさすのでなくトルコ系の人をさすと解されている(E.I. IV p. 805-806)

THE TRADE ROUTES OF JEWISH AND RUSSIAN MERCHANTS

By Katsuji Fujimoto

A Japanese translasion from the Arabic of Ibn Khordadhbeh's KITAB L-MASALIK WAL-MAMALIK.